



# 九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 6 9  
2008(平成20)年7月14日(月)発行

く約220年前の1789年7月14日、パリ・バスティーユ事件でフランス革命勃発の日、凶作が続き、旧体制やブルボン朝のルイ16世やマリー・アントワネットへの不満も高まり、この日パリ市民は専制政治の象徴だったバスティーユ牢獄を襲撃し、フランス革命が勃発。現在は「パリ祭」。近年、この小麦の凶作は、日本の1783年浅間山噴火の噴煙による日照不足が一因ではないか等も議論されています。



技術者めざして工業学校に入学するが

小高区片草 西内(多田)真介

私は一九三二(昭和七)年鹿島区小池生まれで、今年七十六歳になります。現在の原町高校を卒業しますが、原町高校は今から七十年前の昭和十四年四月が創立です。現在の小川町のサンライフ南相馬のところにあった老朽の元小学校の校舎を使い「原町立相馬商業学校」として発足しました。当時相馬地区には、相馬中学校、相馬農蚕学校、双葉中学校などがあり、比較的新しい創立でした。

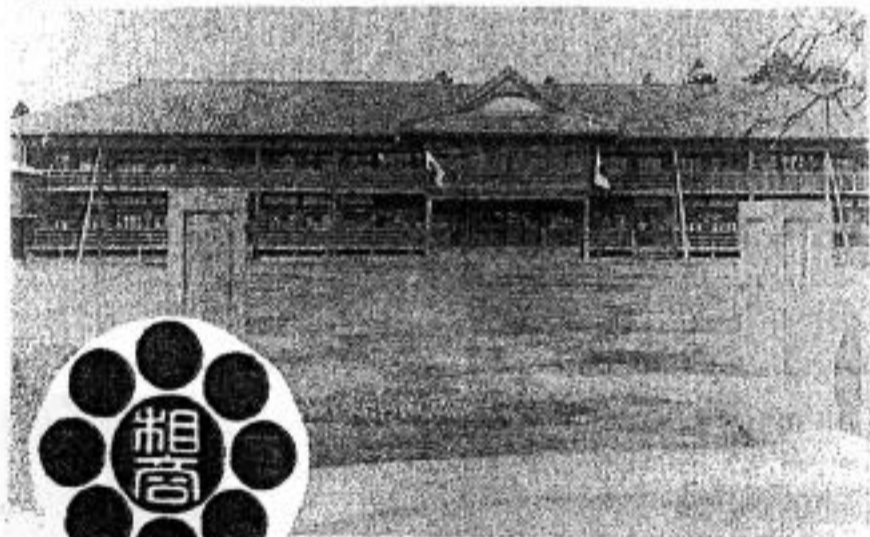
## 設備も無く、専門の先生も

### いない相馬工業学校に入学

しかし、原高は「商業学校」だったので突然、昭和十九年四月から太平洋戦争の「戦時非常措置法」により、学生を労働力として工場で勤労動員させるため、国策で「工業学校」に転換させられてしまったのです。「工業学校」といっても学校に設備は何も無く、商業の先生ばかりで工業専門の先生は一人もいませんでした。

私は上真野国民学校を卒業し、転換したばかりのそんな「相馬工業学校」に希望をもって志願しました。その時の入学試験会場には教官がずらりと並び、一人ずつ試験場に入り何回かの口頭試験に応じ、午後は校庭で体力の度合いを試され発表日を持ったのです。そして合格発表は、二階建て校舎の正面玄関に受験者だけの発表でした。

入学の教科書は遠州屋書店さんで戦前帽、背囊、カーキ色の制服。合格後、戦争中でしたから、入学用品は学校で、布製の背囊(はいのう)、戦前帽、ラシャ製の黄色い九曜星に「相工」と金モールで表示されていた校章、それに巻脚絆、国防色(カーキ色)の制服などを購入しました。教科書は本町の現在の銘醸館の北隣にあった遠州屋書店より買い求めたが、新聞紙のような粗末な紙質で、裁断していないものが大半でした。また先輩から譲りうけることも多かった。入学式は、先輩が川崎の軍需工場や原町紡績工場の通年動員があったので、一年から五



- ▲現在の原町高校の前身の「相馬商業学校」、昭和14年創立時の老朽校舎。現在の小川町にありました。その校章は野馬追に登場する相馬家の「九曜(くよう)の紋」をデザインしたものです。
- ▼空襲を受けた帝国金属工業原町工場跡(原ノ町駅の東・現在の原町保健所や県合同庁舎付近)で、「相馬工業学校」の動員の生徒たち。工場跡地は昭和30年代まで一面の原っぱとなっていた。



年生まで全学年が揃っていたかどうかは定かではありません。学校へは毎日、自転車や石神の山道を列を作って通学しました。授業といえば、入学当時は普通授業だったが、まもなく食料不足を補うために西校庭の一部は畑に変わり、マメやサツマイモなどの農作物を栽培し、残った校庭で教練や体育を行いました。毎日毎日勤労動員作業の連続でした。  
**駅の東の「帝金」工場で作業**  
工業の授業はほんの数回でした。当時、原ノ町駅のすぐ東、現在の保健所や県合同庁舎付近には、「テイキン」とよばれていた「帝国金属工業株式会社」という大きな軍需工場があり、私たち一年生は十二歳で現在の中学一年生の年齢でしたが、そこでわけが分からないまま実習作業を行いました。砂の型に溶けた金属を流し込み、鋳物で機関砲などの部品を作っていました。(裏面へ)



▲昭和17・18年頃、西内さんの先輩の相馬商業学校生の勤労作業。石神でのそばつくりや、原町の西の八木沢峠での薪運搬作業のようす。  
▼小川町の福祉会館やサンライフ南相馬の周囲のケヤキの大樹は、60年前に西内さんたちが植えたもの。



(表のページより)

美術の先生が製図の授業を行う

ほんの数回でしたが、工場の敷地にあった校舎のような大きな建物の中で、たしか中村さんという優秀な技師さんに工業の講義を受けたこともありました。学校では美術の藤田魁先生から烏口(からすぐち)線を引く(鋼筆)を使い、製図の授業を習ったりしました。工業専門の教師でもないのに、先生方も大変だったと思います。

韓国人の仕事ぶりに驚かされる

その「帝金工場」で今でも一番印象に残り、よく覚えていることがあります。それは、「半島人」とよばれていた韓国人がかなりの人数働いていて、溝を掘る作業などを行っていました。その仕事ぶりがすごかった。糸も線も引かないのにピシッと見事にまっすぐにスコップで掘り進んでいき、子ども心にも「たいした仕事をやるもんだ。日本人にはとても出来ないな」と大変感心したものです。

山から薪の運搬作業もつらかった

また、原町飛行場の格納庫の解体作業や偽装用ネット張り、それに木炭トラックで飯館村の山中まで輸送され、バックカメラでの薪や木炭運搬や、原町の高松での開墾作業もつらかった。さらに学期一回ほど、国見山や小高神社を経て海岸線を強行行軍するなどの行事も思い出されます。

入学の時は、工業学校だからやがては工業技術者をめざそうと志し期待していたのに、戦争に振り回されて肝心の勉強などはまったく出来ないまま、終戦後の二十一年四月に学校は再び「商業学校」に戻ってしまい、その意味で誠に残念な青春時代でした。

しかし、あれから六十余年、あの当時鈴木勝利校長や松浦一臣先生(「ハリポッター」の翻訳者松岡佑子さんの父)の指導で私たち生徒が植えたケヤキの木も、今や大樹となって原町福祉会館の周囲に優しい木陰をつくってくれていて、あの付近を通るたびにいつも戦争の学生時代のことを思い出しています。

転覆の原因は「三角波」ではない？

●ブームにのって、40年前に読んだ小林多喜二の『蟹工船』を読みかえていたら、「三角波」がきちんと出ていました。6月23日の千葉沖の漁船「第58寿和(すわ)丸」転覆の原因も「三角波」といわれています。しかし、『AERAアエラ』7月21日号には、軍事ジャーナリスト田岡俊次の「潜水艦の当て逃げ説」が掲載されています●「三角波」を誰も見ていない、転覆後は変に早い沈没、沈没現場は日米潜水艦のコースになっている、等々●謎が多すぎます。漁船が沈む5千メートルの海底に潜水調査艇「しんかい」を潜らせて調査し真相を究明してほしいものです。その筋ではもうウヤムヤにするような手を打ってあるのかも知れません、いつものように。

自衛隊、クラスター弾廃棄に200億円

クラスター爆弾とは、発射された「親爆弾」の中から数十から数百もの「子爆弾」が飛び散り、広い面積に降り注いで広い範囲を一気に攻撃する爆弾。ところがその子爆弾が不発弾になって、終戦後も地雷のようになって住民を苦しめる。

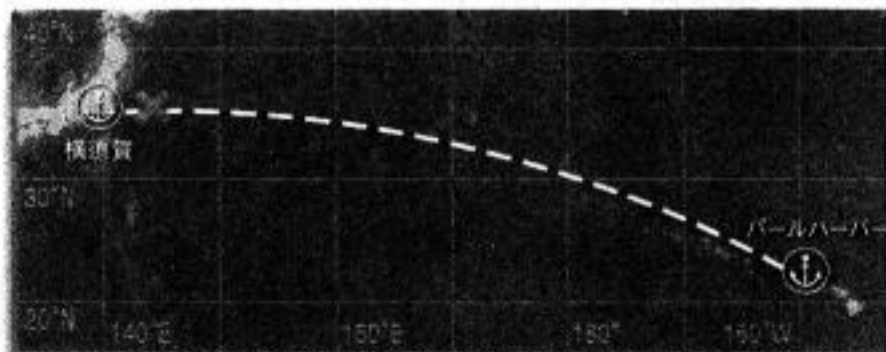
5月30日にダブリンの国際会議で全面禁止条約案が採択され、日本も合意。自衛隊が持つ大量のこの爆弾を廃棄します。しかし購入に約275億円、そして廃棄の経費が200億円。ばかばかしい血税のムダ遣いです。ちなみに、南相馬市の20年度当初予算は約267億円です。



「AERA」7月21日号コトビ

日本が関係した過去の主な潜水艦事故

- 1981年4月8日 鹿児島県鹿児島沖、米弾道ミサイル原潜ジョージ・ワシントンが貨物船「日昇丸」と衝突、沈没させる。死者2人。原潜は浮上後、潜行して去り、ガムで損傷を修理した
- 1988年7月23日 横須賀港で浮上航行中の「あたしお」が遊漁船「第1富士丸」と衝突、沈没させて死者30人
- 2001年2月9日 ハワイ・オアフ島沖で米原潜グリーン・ビルが漁業実習船「よひめ丸」と衝突、沈没させて死者9人
- 2008年11月21日 宮崎県油津港沖で「あたしお」がパナマ船籍のタンカー「スプリングオースター」と後続、「あたしお」の駆逐艦



横須賀とパールハーバーを結ぶ「大圏コース」と漁船転覆現場